様式３

学　位　論　文　要　旨

研究題目

Impact of functional independence and sociodemographic factors on post-stroke discharge destination in a super-aged rural community in Japan

（　超高齢化社会における脳卒中後の退院先に及ぼす機能的自立度と社会人口学的要因の影響　）

兵庫医科大学大学院医学研究科
医科学専攻　　高次神経制御系
リハビリテーション科学（指導教授　道免　和久　）
氏　名　　岩佐　沙弥

本研究は、日本の超高齢地域における脳卒中患者の退院先に影響を及ぼす要因を、機能的自立度と社会人口統計学的要因に着目して明らかにすることを目的とした。

対象は兵庫医科大学ささやま医療センター回復期リハビリテーション病棟に入院した脳卒中患者を対象とした。Functional Independence Measure の運動の点数（FIM-motor）を説明変数として入院時と退院時に患者ごとに評価した。入院中の FIM-motor スコアの上昇も記録した。さらに、性別、年齢などの社会人口統計学的データ、および脳卒中の種類（脳出血もしくは脳梗塞）、脳卒中の既往歴、脳卒中発症から当院の回復期リハビリテーション病院への転院までの日数、急性期治療を含む総入院期間、同居世帯人数、配偶者との同居、子供の人数などの臨床的特徴を収集した。目標値として、退院後の転帰を自宅退院群と介護施設入所群に分類した。説明変数と転帰の関連を評価するために、各説明変数について単変量ロジスティック解析を行った。次に、統計的に有意に検出された説明変数の予測力を評価するために、多変量ロジスティック回帰分析を行った。最後に、説明変数間の複数の共線性を調べるために、説明変数の可能なすべての組の間でスピアマンの順位相関検定を行った。

対象は 160 例（平均年齢±標準偏差、74.80±12.19 歳）であった。そのうち 114 名が自宅へ退院し、46 名が介護施設へ転院した。多変量ロジスティック回帰分析の結果、退院時の FIM-motor が高いこと、同居世帯人数が多いこと、配偶者と同居していることが、在宅復帰確率を高める最も強力な予測因子であることが示された。

本研究は、日本の超高齢地域における脳卒中患者の退院先を予測する上で、機能的自立度と同居世帯人数が重要な因子であることを示した。これらの知見は、機能的自立度の低い高齢患者にとって、自宅退院には支援的な社会的ネットワークが不可欠であることを示唆しており、今後高齢化が進みつつある世界の都市における長期的な健康管理の手がかりとなるものである。